様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６７７
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０１６７

研究課題名（和文）アメリカのサンベルトにおけるリフォーム政治の変容（１９７０年代～２０世紀末）

研究課題名（英文）The Transformation of Reform Politics in the Sunbelt of the United States from the 1970s to the end of the Twentieth Century

研究代表者
平田　美和子（HIRATA, Miwako）

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：９０２４７１２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,600,000円、（間接経費）　480,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀半ばにサンベルトの主要大都市で花開いた「リフォーム政治」は、概ね1970年代以降、変容期を迎えた。富裕層・中間層が大都市中心部を離れる傾向が強まると同時に、公民権運動・反差別運動の進展過程で都市中心部に居住するマイノリティ・貧困層の発言力が増大したこと、合併により大都市自治体の一部となった郊外地域住民の市政への不満や要求が高まったことが、リフォーム政治を変容させる大きな要因となった。しかし、リフォーム政治の変容に郊外住民は必ずしも満足せず、大都市からの分離主義傾向は強まった。これは郊外地域における共和党支持傾向、政治的保守化傾向と密接に関係していた。

研究成果の概要（英文）："Reform politics" in the big Sunbelt cities, which seemed to have reached its apogee in the middle of the twentieth century, entered a period of transformation from around the 1970s. The big city centers were increasingly being abandoned by the wealthy and middle classes, at the same time as African-Americans and other minorities in these central districts, previously woefully under-represented in city politics, started to gain more political say. Meanwhile, suburban dwellers were voicing discontent and making demands of their city government-another instrumental factor in transforming reform politics. Yet these suburban middle-class voters tended not to be satisfied with the outcome and their sense of separatism intensified. There is a close link between this process and such voters' political conservatism and support for the Republican party.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：アメリカ政治　サンベルト　リフォーム政治の変容　大都市圏政治　都市中心部と郊外の対立　共和党優位　政治の保守化傾向

１．研究開始当初の背景

(1) サンベルト地域（南西部・南東部）の都市政治史研究は、いわゆるフロストベルト地域（北東部・中西部）のそれに比べれば少ない。そのためもあり、サンベルトの主要都市で展開された市政改革は研究対象として見逃される傾向にあった。しかし、実際には、サンベルトの主要大都市では革新主義市政改革の所産である「リフォーム政治」が定着し、20 世紀半ば過ぎには全盛期を迎え、その後、1970 年代には「変容」期に移行したといえる。本研究に先だっておこなった「アメリカのサンベルトにおける都市政治改革(1950 年代～今世紀初頭)」（課題番号：20530117）によって、この「変容」期に焦点を当てる研究の重要性を認識したことが、本研究の出発点といってよい。

(2) アメリカでは、1990 年代からサンベルトの主要都市における市政改革の重要性を指摘する研究、サンベルトの都市政治と連邦政治との関連に注目する研究が公刊されるようになった。その過程で、サンベルト特有の政治状況が明らかになる一方、サンベルトの特殊性は次第に薄らぎ、フロストベルトとの共通点が顕著になってきていると指摘する研究もでてきた。だが、サンベルトの市政改革とそれに基づく「リフォーム政治」の実態がきわめて多様で複雑であることもあり、未だ十分な研究がおこなわれているとはいえない。とくに 1970 年代以降のサンベルトの「リフォーム政治」の「変容」がいかなるものであったのかとこの変容と連邦政治との関連についての研究は、未開拓な部分が多い。一方、わが国におけるアメリカ政治・政治史研究は、大半が連邦政治研究であり、地方政治・政治史や連邦政治と地方政治の関連に注目する研究は少ない。

　このような状況下で、本研究は上記の科研費研究「アメリカのサンベルトにおける都市政治改革」の成果を踏まえて、サンベルト主要大都市における「リフォーム政治」の変容とは何か、なぜ変容は起こったのかを連邦政治との関連を視野にいれ、しかも歴史的なパースペクティブの中で考察することとした。

２．研究の目的

　本研究が、研究期間内に明らかにしたい問題は多岐にわたるが、とくに次の問題に重点をおいて解明を試みた。

(1) サンベルトの主要大都市におけるリフォーム政治は、概ね 20 世紀半ばに花開いたが、その後「変容」することになった。この「変容」の実態と特徴はどのようであったのか、「変容」をもたらした要因は何か。

(2) リフォーム政治の全盛期にサンベルトの市政を掌握していたのは、ビジネスエリートをはじめとする富裕層・中間層であったが、「変容」期にはいかなる階層がいかなる動機から既存のリフォーム政治体制に挑戦したのか。

(3) サンベルト主要大都市のリフォーム政治体制は、委員会制、シティ・マネージャー制、無党派選挙制、全市単一選挙区制等の諸改革に基づく統治体制であったと同時に、「併合」あるいは「統合」方式を通じる大都市圏政府形成を伴っていた。こうした改革を実現する過程で、大都市圏の中心都市自治体と郊外地域との関係はどのように変化したか。また、この変化は連邦レベルの政治にどのように反映されたか。

３．研究の方法

　本研究の目的を達成するために、20 世紀後半におけるサンベルトの市政改革過程について大きく次の三つのテーマを設定し、研究作業を進めた。「三つのテーマ」とは、(1)リフォーム政治の「変容」をもたらすことになった外的・内的諸要因、(2)リフォーム政治の「変容」期における市政改革推進主体（階層）とこの主体の改革推進動機、(3)大都市圏化の進展に伴う郊外と中心都市の政治的「対立」とそれが連邦政治に及ぼした影響である。

　まず(1)～(3)のテーマに関連する収集済みの文献を本研究に合わせて整理し直すとともに、新規資料の収集をおこない、デジタル化した文献表とノートを作成した。第二に、サンベルトの主要大都市に関する実証分析をおこなうにあたって不可欠な作業であるリフォーム政治制度の歴史的変遷に関する表・図の作成をおこなった。これらを使ってサンベルトの主要大都市のリフォーム政治制度の展開について再確認した。

　その上で、サンベルトの代表的な主要都市であるフェニックス市（アリゾナ州）とロサンゼルス市（カリフォルニア州）の事例に焦点を合わせて、リフォーム政治の定着と変容について上記の(1)～(3)の観点から考察をおこなった。

４．研究成果

　本研究に着手する以前から、サンベルトの主要都市のリフォーム政治に関して考察をおこなってきた。その成果の一部として、リフォーム政治が 1960 年代以降のアメリカ社会・政治の大きな転換を背景に変容期に入ったことは確認したものの、その詳細については考察にいたらなかった。本研究では、まずフェニックスを中心とする考察によって「リフォーム政治のリフォーム」の実態を具体的に分析できたことは大きな成果である。一方で、過去にほとんど考察の対象としたことのなかったロサンゼルスのリフォーム政治について、19 世紀末期までさかのぼって研究をおこない、同市のリフォーム政治の独自性を明らかにするとともに、その変容がどのような状況の下で発生したのかを分析することもおこなった。これら両都市をはじめとする

サンベルトの主要大都市の政治について、歴史的パースペクティブのなかで市政改革に焦点を当て分析・解明し、さらに連邦政治との関連を視野にいれている点に本研究の独創性がある。日本のみならずアメリカでも研究途上の研究分野であり、アメリカ都市政治・政治史研究の水準を高めることに寄与することができよう。なお、都市政治と連邦政治の関係を考察する上で、州政府の関わり方についての研究が非常に重要であることを再認識したが、この点が今後の研究課題であるといえる。以下は、フェニックスとロサンゼルスに関する研究成果の主要なポイントである。

(1) フェニックスにみるリフォーム政治の変容： フェニックスは、20 世紀に急成長をとげて全米有数の大都市となったが、とくに 20 世紀半ば以降に周辺部を併合し、大都市圏政府を形成することによって発展した。1950 年当時に 17 平方マイルに過ぎなかった市領域面積は、併合によって 1970 年には 248 平方マイルまで拡大したのであり、それに伴い人口も急速に増加した。こうした急激な成長は、市憲章統治委員会（CGC）という市政改革派組織が四半世紀にわたって市政を掌握していたことによって可能になった。1964 年大統領選挙で共和党候補となったゴールドウォーターを含む地元の実業家や専門職を中心とするメンバーによって構成されていた CGC は、無党派・全市単一選挙区制の下で選出される市会とシティ・マネージャーによる市政を支える「第一党」となり、市統治に対するビジネスライクなアプローチを推し進めて有権者の支持を得た。政策的にはビジネスの成長に有利な市政を推進することが優先された結果、フェニックスは企業にとって魅力的な都市へと発展した。

このような CGC による戦後のリフォーム政治体制は、労働者層・マイノリティの低い政治参加によって安定していたのであるが、1960 年代から 70 年代にかけて公民権運動・反差別運動の展開過程で変容せざるを得なかった。マイノリティ、貧困層、その協力者たちが市政の変革を求めたことが、変容をもたらした第一の要因といえるが、CGC への批判はマイノリティ、貧困者からだけにとどまらなかった。ビジネスエリートが主導する CGC の非民主的なあり方に疑問を持つ一部の実業家、合併によってフェニックス市の一部となったが期待通りの公共サービスを得られないことに抗議する郊外居住者、彼らの不満と要求を代弁する保守派政治家が台頭することによって、CGC による市政は揺らぐことになる。経済成長を重視する一方で、失業、貧困等の社会問題への対応が不足していることへの批判が高まり、リベラル派ばかりでなく、超保守派からも挑戦を受けることになったのである。

1970 年代半ばには CGC によるリフォーム政治体制は崩壊し、代わってマイノリティを含む様々な草の根のグループが議論を闘わせる体制へと変わっていったが、CGC 時代の市憲章が修正されたのは 1980 年代に入ってからであった。マネージャー制は維持されたが、市長を除く市会のメンバーは、全市単一選挙区制ではなく、ディストリクト制によって選出されることになった。これによって多様なグループがそれぞれの利益を代表する候補者をたてて選挙を戦う新たな方式へと変化していったのである。

1960 年代から 70 年代にかけて、ビジネスエリート主導のリフォーム政治体制は、フェニックスだけでなく、サンベルトの他の主要都市でも草の根の挑戦を受けていた。その結果、アルバカーキ、ダラス、サンアントニオ、サンノゼも 1970 年代に全市単一選挙区制を放棄した。サンディエゴは、フェニックスより後まで全市単一選挙区制を保持していたものの、1980 年代の終わりにはディストリクト制を採用するにいたった。一方で、シティ・マネージャー制や無党派主義は、サンベルト大都市の多くで維持されたのであった。

(2) ロサンゼルスにみるリフォーム政治の変容： ロサンゼルス市は、市政改革に関して他のサンベルト主要大都市と共通点をもつと同時に独自性をもっていた。サンベルトの主要大都市の多くが委員会制またはシティ・マネージャー制を導入したのに対して、ロサンゼルスでは市長制が維持された。しかもフロストベルトの主要都市が市政改革の方策として採用した「強い市長制(strong-mayor system)」ではなく、水供給を管理・運営するための水委員会(Water commission)をはじめとする行政委員会が多くの権限をもち、政策決定に大きな役割を果たすという体制がロサンゼルス市政の特徴であった。1925 年市憲章は革新主義市政改革の集大成であり、20 世紀のロサンゼルス市政府の基礎を確立した憲章であるといわれるが、市政府全体は「市長・市会・委員会制度(mayor-council-commission form)」と呼ばれる権力分散型システムとなっている。その結果、官僚とビジネスエリートとが市政に強い影響力を発揮することになった。

市政府制度の改革と並んで、ロサンゼルス市にとっても周辺部を合併して大都市圏政府を形成することが市政改革の重要な一環であったが、同市は他のサンベルト主要都市に先んじて併合によって市領域面積と人口を 20 世紀前半に急増させた。1910 年に 99 平方マイルであった領域面積は 1940 年には 448 平方マイルに達し、その間に人口は 32 万から 150 万へと増大したのである。こうしたロサンゼルスにおける大都市圏政府の発展は、第二次大戦後のサンベルトにおける大都市圏政府興隆のさきがけといってよいものであった。しかし、大規模な合併によってロサンゼルスの一部となった郊外地域と都市中心部との対立も、他のサンベルト都市よりも

早期に顕在化していった。

合併によってロサンゼルス市の一部となったものの、長年にわたって同市からの分離を求める運動を展開したサンフェルナンド・バレーは、都心部と対立する郊外の典型であった。本研究は、「20 世紀のアメリカ郊外の縮図」と呼ばれたサンフェルナンド・バレーの分離運動とリフォーム政治の基礎となっていた 1925 年市憲章の抜本的改正との関係を分析することを通して、ロサンゼルスのリフォーム政治の「変容」を考察した。また同時に、都心部と郊外地域との対立が連邦政治における民主党と共和党の対立につながっていることを指摘した。

1970 年代当時、ロサンゼルス市政は穏健なリベラル派民主党員のブラッドリー市長を支持する有権者連合の下にあったのに対して、サンフェルナンド・バレーは共和党支持の保守派が多数を占めていた。当時の大きな争点であった人種統合のためのバス通学問題と大幅な固定資産税引き下げを内容とする住民提案「プロポジション 13」に関して、バレーはバス通学反対運動と住民提案支持運動の中心となっていたのである。郊外の白人住民による強制バスボイコット運動と共和党の躍進の関連については、アトランタやシャーロットに関して過去におこなった研究結果と符合する部分が大きかった。

サンフェルナンド・バレーの分離運動がロサンゼルスのリフォーム体制の変容と最終的に結びつくのは、1990 年代に実現したロサンゼルス市憲章の抜本的改正においてであった。バレーの分離によってロサンゼルス市が崩壊する脅威を認識したダウンタウンのビジネスエリート・グループの強い影響力を背景に、市長と市会が参加型の民主的で、反応の早い市政府を実現するために憲章改正案をまとめたのである。その結果、土地利用計画への地元コミュニティ参加が高まり、またコミュニティのニーズを市政府に伝えるための新しい審議会設立が実現した。郊外コミュニティの意見や要望を市政に反映させる仕組みが講じられたばかりでなく、市会の選挙区割に関してもサンフェルナンド・バレーに有利な選挙区割が実現したのである。

他のサンベルトの主要都市において 1960 年代以降、マイノリティの利益を阻害する制度として改革の対象となった全市単一選挙区制に関しては、ロサンゼルスの場合、すでに 1925 年市憲章において廃止されていた。その意味では、リフォーム政治の「変容」を先取りしていたともいえるだろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

1．平田美和子「フェニックスにみるリフォーム政治の定着と変容」『武蔵大学人分学会雑誌』査読無、第 45 巻第 1・2 号、2013 年、41-63.
2．平田美和子「ロサンゼルスにおける郊外の分離運動と市憲章の改正」『武蔵大学人文学会雑誌』査読無、第 44 巻第 1・2 号、2012 年、59-77.
3．平田美和子「ロサンゼルスにおける市政改革の展開とその特徴」『武蔵大学人文学会雑誌』査読無、第 43 巻第 2 号、2011 年、3-31.

６．研究組織

(1)研究代表者

平田　美和子（HIRATA, Miwako）
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：90247122

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし